

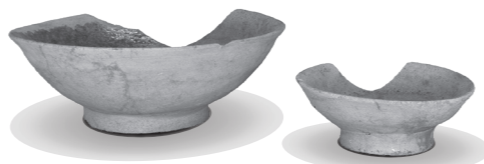
美濃窯の移り変わり時代区分

西暦	焼き物の種類	猿投窯編年	美濃窯編年	出来事		
800	原始 灰釉	折戸10号	細々とした 須恵器生産	794年：平安京へ遷都 801年：坂上田村麻呂、蝦夷の平定 810年：菓子の変 816年：空海、嵯峨天皇より高野山を賜る		
九世紀		黒笹14号		展示した窯跡の所属時期	842年：承和の変、藤原氏による他氏の排斥	
		黒笹90号		北丘8号 光ヶ丘1号 北丘14号 大針4号	858年：藤原良房、摂政になる。摂関政治の始まり 866年：応天門の変、藤原氏による他氏の排斥 869年：貞観地震	
		折戸53号		光ヶ丘1号	887年：宇多天皇と藤原基経、阿衡事件 894年：菅原道真、遣唐使を廃止	
十世紀		灰釉陶器		東山72号	大原2号	901年：昌泰の変、菅原道真の左遷 902年：延喜の荘園整理令
						927年：延喜式の成立
						939～941年：平将門、藤原純友の乱
						967年：延喜式の施行 969年：安和の変、藤原氏による他氏の排斥 974年：尾張の郡司・百姓ら、国司を訴える
十一世紀		灰釉陶器		不明瞭	丸石2号	987年：美濃の百姓ら、国司の留任を求める 988年：尾張の郡司・百姓ら、国司を訴える 996年：長徳の変、藤原道長による中関白家の排斥
						1000年：美濃の百姓ら、国司の留任を求める 1008年：尾張の郡司・百姓ら、国司を訴える 1016年：尾張の郡司・百姓ら、国司を訴える 1016年：藤原道長、摂政になる
	1028年：平忠常の乱					
	1051～62年：前九年の役、東国における源氏勢力の伸張					
	1068年：後三条天皇、延久の善政、摂関政治の終り 1069年：延久の荘園整理令					
十二世紀	山茶碗	第3型式 第4型式	矢戸上野2号	1083～87年：後三年の役、奥州藤原氏の台頭 1086年：白河上皇、院政の始まり		
				1096年：永長地震		
				1108年：源義親の乱		
				1124年：藤原清衡、中尊寺金色堂の建立 1129年：鳥羽上皇による院政		

◆編年については下記の資料を元に作成した。
井上喜久男氏 2015年「第4章 特論 第5節 編年論 瓷器」『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投窯』
尾野 善裕氏 2015年「灰釉陶器生産地域の拡大～猿投窯からみた駿遠地域の窯～」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』東海時研究会
山内 伸浩氏 2008年「東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の一様相」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料』

次代の焼き物～山茶碗～

大量生産によって高級品から日用品へと変貌していった灰釉陶器は、生産の効率化による粗製化が進み、平安時代の後半（11世紀末）には施釉という最大の特徴を捨てることとなります。いわゆる『山茶碗』の誕生です。こうして灰釉陶器の時代は終りを告げ、平安時代後半（11世紀末）から戦国時代前半（15世紀末）に至るまで、およそ400年に渡って美濃窯では誰もが気軽に使える日用品として山茶碗を大量生産していくこととなります。



▲ ほうの木古窯
11世紀末～12世紀初 可児郷土歴史館蔵

企画展

KAIYU Ash Glazed Pottery
Mino Ware in the Heian period

灰釉陶器

— 平安時代の美濃焼 —

灰釉陶器とは

灰釉陶器（白瓷ともいう）は、草木灰を原料とする釉薬『灰釉』を用いた日本初の高火度施釉陶器です。古墳時代（5世紀前半）から作られてきた須恵器に代わる焼き物として、平安時代（9世紀初）に尾張国の猿投窯において誕生しました。窯内で燃料の薪が灰になって降りかかることで生じる自然釉を意図的に利用した奈良時代（8世紀中）の原始灰釉陶器を出発点として、唐・奈良三彩等の鉛釉陶器（低火度施釉陶器）の知識も踏まえて生み出されたものだと考えられています。中国（唐）の陶磁器や金属器の模倣品も見られますが、日本産の高級食器や仏具として生産が行われ、量産化が進むと日用品としても利用されるようになっていきました。猿投窯で始まった灰釉陶器の生産技術は、やがて美濃や三河、遠江等へ伝わり、東海地方の各地へ生産地は広がりました。また、少数ではありましたが、灰釉陶器よりも高級な儀式用品として唐・奈良三彩の系譜を継ぐ緑釉陶器（鉛釉を用いる低火度施釉陶器、青瓷ともいう）の生産も行われていました。藤原実資（10世紀後～11世紀前）の日記『小右記』には、「仏器料瓷器等可召尾張美濃者」（仏器に用いる瓷器は尾張・美濃国に納めさせよ）とあり、尾張国と美濃国が瓷器（灰釉・緑釉陶器）を生産し、都へ納めていた国だったことがわかります。

美濃窯への技術導入

飛鳥時代（7世紀前半）以降、地元の需要の一部を満たす程度の細々とした須恵器生産を続けるのみで窯業地というには程遠い状況だった美濃窯ですが、平安時代（9世紀後半）に猿投窯から灰釉陶器の生産技術を導入したことによって状況は一変します。この技術導入は美濃窯の陶工たちが技術だけを取り入れたのではなく、猿投窯の陶工たちの移住もあったと考えられています。

須恵器：無台坏

灰釉陶器：碗



▲ 北丘8号窯
須恵器と灰釉陶器を焼いていた始まりの窯 9世紀末～10世紀初 多治見市教育委員会蔵



▲ 北丘14号窯 9世紀末～10世紀初 多治見市教育委員会蔵

次回展示 重文公開「元屋敷陶器窯跡出土品展」

企画展「土岐市の古窯-御殿窯-」

開催期間：2018年2月23日（金）～5月27日（日）

会場：土岐市美濃陶磁歴史館

土岐市美濃陶磁歴史館

土岐市泉町久尻 1263 TEL. 0572-55-1245
入館料：一般200円（150円）、大学生100円（70円）、高校生以下無料
障がい者手帳をお持ちの方[一般]100円[大学生]50円 ※（ ）内は20名以上の団体料金
開館時間：午前10時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
休館日：月曜日、祝日の翌日（ただし、12/24、1/8、2/12は開館）、年末年始（12/26～1/6）

美濃窯の隆盛

9世紀後半に可児郡内の狭い地域で始まった美濃窯の灰釉陶器生産は、やがて周辺地域へと拡大していき、窯数が急増する10世紀前半から後半にかけて土岐郡内、恵那郡内にも複数の窯場ができました。この美濃窯の隆盛に反比例するように猿投窯は衰退していき、猿投窯に代わって美濃窯の製品が日本全国へと広く流通するようになります。美濃窯は、極めて良質な陶土と豊かな森林、水資源を背景に成長を続け、この灰釉陶器生産によって、今日まで続く日本屈指の大規模窯業地としての地位を確固たるものとしたのです。

可児郡の窯場

9世紀後半に北丘・大針地区（多治見市）で始まり、10世紀前半には北西の長洞・室原地区（可児市）や南東の大原・昭栄地区へと広がっていきました。10世紀後半以降は、大原から明和、虎溪山にかけての地域（多治見市）へ窯場は移り変わっていきましたが、11世紀末まで生産が続いた美濃窯の中心地域といえます。灰釉陶器に加えて、緑釉陶器も生産されていました。



▲ 北丘15号窯 10世紀後 多治見市教育委員会蔵



▲ 虎溪山1号窯 10世紀後 多治見市教育委員会蔵



▲ 丸石2号窯 11世紀前 土岐市美濃陶磁歴史館蔵



▲ 正家1号窯 10世紀後 恵那市教育委員会蔵

土岐郡の窯場

10世紀前半に生田地区（多治見市）に窯が築かれたのを始めとして、10世紀後半には土岐津地区（土岐市）にも窯が築かれています。11世紀前半には丸石地区（土岐市）や大久手地区（瑞浪市）にいくつもの窯が築かれ最盛期を迎えますが、11世紀中頃以降は衰退していきました。緑釉陶器は見つかっておらず、灰釉陶器の生産のみだったようです。

恵那郡の窯場

近接する正家地区と永田地区、やや離れて位置する亀ヶ沢地区の3ヶ所に窯場が見られます。調査が行われた窯が少ないため詳細の不明瞭な点もありますが、いずれも10世紀後半頃のものだと考えられています。永田地区と亀ヶ沢地区では灰釉陶器に加えて緑釉陶器も生産されていました。

各地へ運ばれた美濃窯産の灰釉・緑釉陶器

美濃窯の製品は全国へと流通していますが、東山道が主要な流通経路でした。国府間交易によって各地にもたらされ、国衙から郡衙、さらに豪族等の拠点集落へと運ばれ、そこから一般集落へと流通していたようです。



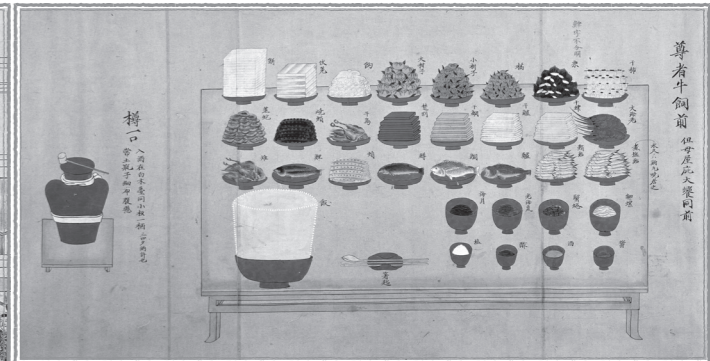
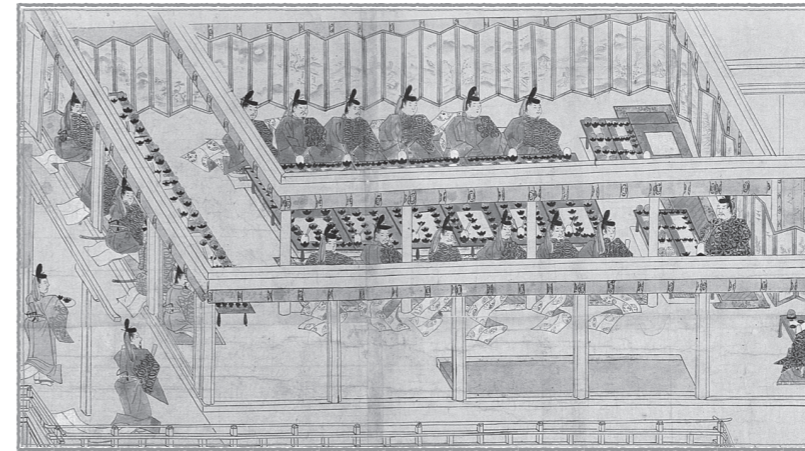
▲ 堀の内遺跡（4号住居）10世紀後半 松本市立考古博物館蔵



▲ 山王廃寺跡出土 10世紀後半 群馬県立歴史博物館蔵 重要文化財

灰釉陶器の用途

灰釉陶器は日本産の高級食器、仏具等の儀式用品として生産が始まりました。量産化が進むにつれて、生産地の近隣では農民層でも利用できる日常の器となっていくますが、生産地から遠い地域では特別な日にだけ用いる器、家長などの偉い人だけが使える器といった、やはり高級な器だったようです。碗は白飯や汁物、小碗は調味料類、皿類には惣菜を盛り付け、膳等に載せて用いられました。貴族階級の人々の饗宴では、とても食べきれないほどの料理を並べて振舞われたようです。



▲ 類聚雑要抄 卷一下 尊者牛飼前 模本（部分）18世紀

◀ 左：年中行事絵巻 大臣大饗図 模本（部分）19世紀

東京国立博物館所蔵 (Image: TMN Image Archives)

生産技術の伝播

9世紀初めに猿投窯にて誕生した灰釉陶器は、9世紀前半に同じ尾張国の尾北窯や三河国の二川窯へ、後半に入ると美濃窯へと伝わります。10世紀に入ると、東は遠江国と駿河国、西は近江国まで生産地が広がります。その他にも、美濃国の美濃須衛窯、伊勢国の岡山・七和窯や、三河国の幸田窯でも生産が行われていました。窯業地として著名な瀬戸窯も10世紀後半の灰釉陶器生産がその始まりです。このように猿投窯から東海地方の各地へと生産地は広がっていきましたが、それらの諸窯の中で10世紀以降に最大の生産地へと成長したのが美濃窯でした。尾北窯や美濃須衛窯のように須恵器の大規模生産地だった窯場はもちろん、他の諸窯も当時の主要な街道に近く、陶土と森林、水資源の豊富な窯業に適した土地だったようですが、やがて窯業は廃れていきます。そういった中で、美濃窯と瀬戸窯は現代に至るまで連続と窯業地として続いており、窯業に最適な土地だったことがわかります。

